

第一部：文化が言語をつくり、 言語が新しい文化を育てる

はじめに 英語の言語構造を知る

私は、2024年3月で80才を迎えた。これを機に3月15日で発明くんと一緒に引退することにした。引退後は、私の関心ごとであった「言語と文化」について、勉強を続けていきたいと思っている。

私は1990年、「知的財産活用研究所(IPMAの前身)」を発足させ「世界で通用する、戦える強い特許明細書を作ろう」というスローガンのもと、翻訳が難しい「曖昧日本語」に対し、やさしい「平明日本語」の必要性を訴えて来た。

この活動を支えてくれたのが篠原先輩である。彼とのご縁は、「日本から出願した米国特許明細書の検証に多くの技術者や知財部員が困っている」という、私からの相談から始まった。

先輩は、自分の目で確かめて「なるほど、これはちょっと酷いですな、明確さが求められる特許の世界までが、こんな状況になっていることが信じられない」と、絶句した。これをキッカケとして、彼は特許の世界へ足を突っ込むことになった。恐らく「このままでは日本の特許は世界で通用しない」という危機感であったと思う。

先輩は私に「なぜYOUは英語が苦手なのか、その理由は何か、ではどうすれば良いのか」と言われても「私のアタマが悪いからだ」と答えるしか無い。しかし彼はYOUの責任ではない、学校での英語学習法に問題あったからだ、と慰めてくれた。そして、「やはり日本の英語教育システムに問題がありそうだ」と、改めて感じたようだ。

先輩は英語ができない私にアドバイスをくれた。「文化が言語を生み、言語が文化を育てる」という観点から英語(外国語)学ぶことが早道である、と。この基本を知ることによって“欧米人は何故、そのような言い方をするのか、あるいは書くのか”が良く理解できるようになる”と。つまり、「英語の言語構造」を知ることが語学学習の基本であることを教えられた。

また世界共通の普遍的言語であるである「**文明言語**」と、そうでないその国の文化にの根差した「**文化言語**」の複雑さと学ぶことの難しさを教えてくれた。そして数日後、これまで見たことも、聞いたことも、教わったこともない、切り口からの「英語学習法入門テキスト(pdf 15p)」を作成してくれた。

2002/03/09 言語構造から学ぶ「英語学習法入門テキスト」は、[こちらから](https://www.ipma-japan.org/pdf/20240111-01.pdf)

<https://www.ipma-japan.org/pdf/20240111-01.pdf>

1、文化が言語を生み、言語が文化を育てる

—篠原レポート 2006/10/25 から引用—

ある程度の同一的なモノの観方や考え方を共有している集団は、同じ文化を持っていると見なすことが可能である。そのモノの観方や考え方は、言語で表現される。同時に、人は言語でもって物事を考える。従って、文化と言語は極めて密接な関係があり、一つの文化を共有している集団は、母国語もほぼ共有していると思なすことができる。文化が言語を生み、言語が文化を育てると言われる所以がここにある。

モノを観る方式は、言語の構造に反映される。モノを考える順序は、その言語の順序に反映される。単純化を恐れずに、西ヨーロッパの人々の、モノの観方、考え方を纏めてみる。

まず自分が何者であるかを、自然や他者との比較することで自分を確認する。つまり自分が、ある環境の中で“何を、何のために”しているのかを絶えず確認し続け、機会あるごとにそれを表明する図式となる。それは、他者と自分を対立する客体 (Object) として、客観的に (objectively) 観察し、分析し、評価し、報告される。

ここから自然科学が生まれ発展する。また人間が構築した社会も同じように眺め、分析し、評価しようとする。これが社会科学へ繋がる。これらの基本姿勢から、自然や他者に関する報告を重視し、その情報収集に勤め、それを分析評価する作業 (インテリ ジェンス) を重視し、そこへの働きかけを、戦略的計画の下に行うという形が出てくる。すべてが自己から発している。

英語が論理表現に適している言語であるとするれば、日本語は詩歌の表現に適した、極めて叙情的な言語と言えるかもしれない。その曖昧さと余情が、色彩と造形の世界とあいまって、日本の美を作り上げてきた。外国の方が日本語を習得しようとするればその曖昧さという障壁を克服することは難事業だろうな、と同情もしたくなる。

一方、世界の人々を相手として意識したときに、誰にでもわかる平明な表現というようなことを、われわれは意識してきたであろうか。そのための努力をしてきたであろうか、否である。世の中に溢れている日本語文章の特徴の一つは、文字が意味を持つ漢字に依存して、私が何を言いたいのか「お察し願います」というスタイルであり、受

け手(読み手)も「およそこのような意味なのでしょう」とわかったつもりで収めてしまうところにある。

この相互関係の結果、文章の構造は極めて自由であり、設計図無しに家を建てているようなものである。「柔構造」といえば聞こえは良いが、各人がそれぞれ「自由気まま」に書いている文章と言える。これに反して、英語をはじめ欧州言語による文章は、論理的にしっかりと組み上げる「構造的文章」といえる。

漢字は言うまでもなく言語を表記する記号であると同時に、一つの文字自体が意味を表現している。西洋のアルファベットは単に記号であり、意味を伝えるにはその記号をいくつか組み合わせて「単語」に仕立てあげる必要がある。企業内の報告書から官庁の通達文書まで、あらゆるところで曖昧な日本語文章が溢れている一つの原因は、このなんとなく「感じ」で分る「漢字」を使用しているところにある。

文章を書いている人は、「なんとなく」、読み手がわかってくれるだろうとの甘えがある。一方、読む人は「なんとなく」わかったつもりになって満足している。このような相互関係の下では、曖昧文書が厳しく指摘されることはない。

単純化を恐れずに、日本の人々の、モノの観方、考え方を纏めてみる。つまり自然・環境の中に溶け込んで存在している自分を確認し、その自然・環境の説明をつけて、自分の存在を「控え目」に表明する。つまり、自然を客観的に眺めることはせず、その中に溶け込み、自然と一体化する。当然ここからは、自然科学は生まれない。

人間以外の生物を含めて、自分と同列の、つまり対等の存在と認め、その相手との関係の中で自分の存在を確認する。従って自己表明は、相手の存在を意識し、調和を最優先してなされる。つまり、常に全体の中の自分という図式での確認であり、全体を語らずして自己を語ることは難しい。以上のように、文化の違い、つまり、モノの観方や考え方の違いは、当然言語の違いに反映される。それは、言語の構造の違いと、表現の順序の違いとなって現れている。(以上)

【補足】先輩は、欧米言語の成り立ちを知るには、ヨーロッパの歴史を勉強することを私に奨めてくれた。私が選んだ書籍は、『超約 ヨーロッパの歴史(増補版)』と『日本人が知らない 世界史の原理』の2冊である。この書籍から学んだことをキチンと間違いなく作文する能力は私には無い。書籍からの原文引用で書き残すことにした。(矢間伸次)

2、ヨーロッパの誕生とヨーロッパ文明の特性

書籍:『超約 ヨーロッパの歴史』 増補版 著者: ジョン・ハースト

日本語版監修者:福井 憲彦 訳者:倉島 雅人:発行所:東京書籍株式会社
2019年4月25日 初版 第1刷発行 2019年12月24日 第5刷発行
2023年9月11日 増補版 第1刷発行

『この書籍は、古代ギリシャ、ローマの世界から現代のEUに至るまでの長期的なスパンを念頭に、ヨーロッパ文明の特徴とは何であったのか、またその地域社会は、どのような可能性や問題点を人類社会に投げかけてきたのか、という本書には、読者に知識を与えると同時に、考えさせる記述が満ちている』。(序文から引用) p5

著者のジョン・ハーストは、ラ・トローズ大学に40年近く所属し、教鞭をとっていたオーストラリア出身の歴史家で、執筆の動機は最近の学生たちはオーストラリアという自国の起源に関わっていたイギリスや、そのイギリスが位置していたヨーロッパ世界の歴史について、あまり知らなさすぎるという著者の危機感にあったらしい、と書籍の序文で紹介されていた。

第一の要素、古代ギリシャとローマ

『哲学、芸術、文学、科学、医学、政治思想—、これらすべての知的行為はその起源へと辿ると古代ギリシャにたどり着く。ギリシャはその偉大なる栄光にあった時代、単一国家ではなかった。それは、現在の視点では都市国家とも呼ばれる小国家の集合体であった』。(原文引用)p15

『ギリシャ植民市は、現在のトルコ、北アフリカ沿岸地域、スペイン、南フランス、南イタリアなどに進出し、植民市を建設したが、イタリアにはローマ人が住んでいた。(略)やがてローマ人はギリシャ本土やそのすべての植民市をものみこむ巨大な帝国を打ち立てた』。(原文引用)p15

◆ローマ人が、“ギリシャ人は自分たちよりも優れている”ということを知っていたと、書籍に書かれていた。新しい発見であった。(矢間)

第二の要素 キリスト教

『ユダヤ人は、この世にはただひとつの神しかいない、と信じるようになった。これは、きわめて特殊な考え方である。ギリシャ人やローマ人の間では、この世は数多くの神が存在するというのがごく普通の考えだったからだ。さらにユダヤ人は驚くべき信仰を作り上げていた。それは唯一の神が特別にユダヤ人の面倒を見てくれる、なぜなら自分たちは神に選ばれた民だから、というのである』。(原文引用)p22

キリスト教の創始者キリストはユダヤ人であること知っていたが、なぜキリスト教が世界の宗教になったのか、よくわからなかった。キリスト教がユダヤ人だけのものではなく、万民の物であることを明確に示したのはパウロであり、パウロの布教活動からキリスト教が世界宗教になった、という説には納得できた。(矢間)

第三の要素 ゲルマン人

『ヨーロッパという混合物を形成する第三の要素は、ローマ帝国に侵入したゲルマン戦士である。彼らは北の辺境に暮らしていたが、紀元5世紀には人口が爆発的に増加していた。476年ゲルマン人は、ローマ帝国の西方領土を滅ぼした。その主要地域は、現在のフランス、スペイン、イタリアにあたり、ヨーロッパ文明という混合物の最初の姿が現れた』。(原文引用)p29

『西に向かったゲルマン族の一つだけが永続的な国家を作りあげた。それがフランク王国である。その版図は現在のフランス全土とドイツ・スペイン・イタリアの一部まで及んだ。フランスという国名は、ゲルマン部族の一つ「フランク族」に由来している」。原文引用 p97-98

『イングランドは、島の東部において外部からの侵入を二度経験した。最初はアングル人、サクソン人、ジユート人のゲルマン人、そしてノルマン人である。二つの侵入者はいずれもゲルマン系の言葉話す人々だったため、このゲルマン語が今日の英語の基盤となった。(中略)イングランドのノルマン人は独特のフランス語を話していたがこの一部がゲルマン語とミックスされて、のちの正式な英語を形成した』原文引用 p107-108

3、ヨーロッパの歴史から学ぶ「言語と文化」

書籍:『日本人が知らない「世界史の原理」』(発行:ビジネス社)

異色の予備校講師が、タブーなしで語り合う 茂木誠 宇山卓

1、最大の謎、日本語の起源を考える p85-86

茂木:

『1, 日本人の原型を作ったのは一万数千年にわたりこの列島で生活を営んできた縄文人であり、日本語もこの時代に形成されたものと推定できる。2, 弥生時代と古墳時代には、大陸の戦乱を避けて大量の渡来人(新モンゴロイド)が日本列島に渡ってきたが、彼らは縄文人と共存して日本語を学び日本人になっていった。(中略)この縄文の遺伝子が現代人まで受け継がれているという事実は、世界の中で日本人の特性—、気づかいややさしさ、自然との共存—を考えるうえで無視できないことだと思います』。

宇山:

『縄文時代が日本人の原点だと思いますし、縄文人の気質が我々の中に残っています。日本人はいつの時代にも外来の文化と敵対することなく巧みに受容しつづけ、それを日本の文化に作り変えてきました。異なる価値観を持った人々と争うのではなく、それをとりこんできましたし、その共存協調の驚くべき力こそ縄文人のDNAを色濃く受け継ぐ日本人の原点でしょう』。

茂木:

『大陸の戦乱に巻き込まれなかった日本列島という「非難所」で縄文人が長い、長い時間をかけて育て上げた森の文化と言葉。これが日本文化です。日本列島へ逃れてきたさまざまなルーツを持つ渡来人が、ゆっくりとこれを受け入れ、形成してきたものだったのです』。

2、ヨーロッパの国々は、どのように誕生したのか p116-119

宇山:

『ヨーロッパは中世以降、分断国家として歴史を歩むこととなります。800年カール大帝が西ヨーロッパを統一するも一代しか続かず、彼の死後、帝国はドイツ、フランス、イタリアの3国に分断されます。ヨーロッパで、中国のような巨大統一王朝が形成されなかった主な理由として、地政学的な特徴が挙げられるでしょう』。

茂木：

『地形はものすごく重要です。騎馬民族が入り込めない深い森が続くアルプス以北の西ヨーロッパは、ロシアや中東、中国などユーラシア中央部とはまったく別の道を通りました。民族が混じりあうことが比較的少ないため、それぞれの民族文化がゆっくりと醸成され、話し合いと合意によって物事が決まるという文化が育ちました』。

宇山：

『また4世紀のゲルマン人の移動以降、ラテン人(ローマ人)、ゲルマン人、スラブ人の3勢力が均衡し、互いに牽制し合いながら、バランスをとるという政治力学が優先されました。こうした状況で、西ヨーロッパでは、ラテン人の領域として、フランス、イタリアが、ゲルマン人の領域としてドイツが区分化されて行きます。(中略)』

これら3国の中で、ゲルマン人の文化や言語を受け継いだのは東フランク王国(ドイツ)でした。(中略)ゲルマン人は、言語までも支配するには至らず、ラテン語文化が残り、そこから派生してフランス語が形成されます。そして、人口の大半もラテン人が占めました。イタリアは教皇がおり、カトリックによる文化統治が徹底されたため、ラテン語文化が保持されます』。

3、水上の交易ネットワークを独占したノルマン人 p120-122

宇山：

『9世紀、西ヨーロッパは大きく成長し、豊かな経済がマーケットや、それを繋ぐ商業ネットワークを生んでいます。トラックや鉄道が北海のなかった当時、モノの運搬は海の路を行く船で行われていました。バルト海や北海のヨーロッパ北部沿岸部に物流拠点が形成されます。そして、その物流を担ったのが「ヴァイキング(入り江の民)」と呼ばれるゲルマン人の一派でした。彼らは、北方に住んでいたため、「北方の人=ノルマン人」と呼ばれています』。

宇山：

『(水上の交易ネットワークを独占したノルマン人は巨万の富を蓄積し、イギリスやロシアに自らの国を築いています』。

4、アングロ・サクソン人とイギリスの歴史 P122-126

宇山:

『一方、北海・ドヴァー海峡で、現地人(アングロ・サクソン)やノルマン人同士の複雑な抗争を経て 1066 年、ノルマン王朝がつくられます。ノルマン王朝はイギリスの母体となります』。

宇山:

『イギリスには 11 世紀にノルマン王朝が成立する前に、アングロ・サクソン人が定住していました。アングロ・サクソン人もまたノルマン人同様にゲルマン人の一派です。(中略)。17 世紀にはイギリス人がアメリカ新大陸に入植したため、アングロ・サクソン人はイギリス人とアメリカ人の両方を指すようになります。これが今日においても「世界の支配者」と呼ばれるアングロ・サクソン人のルーツです』。

(*)アングロ・サクソン人は 5 世紀、ドイツの北西部からブリテン島に移住したアングル人とサクソン人の総称であると書かれている。

茂木:

『アングロ・サクソン人もドイツのザクセン人も同族で、英語はドイツの語の方言です。ところが海外発展して植民地帝国を築いたイギリスに対し、ドイツはそうならなかったのはなぜか、という点に私は興味があります。(中略)』

イギリス王家は、父祖の地であるノルマンディーを巡るフランスとの戦いを断続的に続けました。最終的には「100 年戦争」で敗北したため大陸領土を放棄し、純然たる島国になりました。しかしこの敗北こそ、その後のイギリスを大発展させることになったのです。英仏間のドヴァー海峡の幅は、日韓間の対馬海峡の幅の 6 分の 1 以下ですが、潮の流れは急で、大陸からのイギリス上陸を拒んできました。(中略)』

島国となることで地政学的優位性を得たイギリスは、本国防衛には最小限の兵力だけ残し、余力を海外の植民地建設に振り向けることができたわけです。海に出たがるバイキングの遺伝子と、大陸から攻めにくい地政学的優位性。これが大英帝国を生み出した原因だと私は思います』。

5、覇権国家・三つの条件とは

イギリスの世界支配・覇権の構造 p247-249

宇山:

『イギリスは巧妙な「収益・収奪」のシステムを形成し、膨大な利益を世界中から集めました。社会学者のイマニュエル・ウォーラーステインによると、覇権国家は「圧倒的な生産力」、「圧倒的な流通力」、「圧倒的な金融力」の三つの条件を持ちます。近世以降、そのような覇権国家となった国はオランダ、イギリス、アメリカの三つの国だけである、とウォーラーステインは述べています』。

茂木:

『もう一つのポイントは、ユダヤ人です。投資や金融はユダヤ人の得意分野ですが、スペインのイサベル女王が、レコンキスタ(対異教徒戦争)に勝利した結果、ユダヤ人を全て追放してしまいました。行き場のなくなったユダヤ人は、スペインの宿敵である英欄に難民となって大量流出しました。

このことは、アムステルダムやロンドンにユダヤマネーが流出したことを意味します。世界初の中央銀行はアムステルダム銀行ですし、世界初の先物取引もアムステルダムで始まりました。17世紀、オランダの貿易量は世界貿易の50%に達しています。

ユダヤ人は新大陸に英欄が建設した植民地にも流出しました。たとえばオランダ領ニューアムステルダムはユダヤ人の避難所として出発し、後の英欄戦争で英領となりニューヨークと改称しました。

当時のニューヨークは、マンハッタン島の南半分だけであり、境界線にはオランダが建設した城壁があました。ニューヨークの発展とともに城壁(ウォール)が取っ払われて東西道路となり、壁の記憶は「ウォール街」の名前として残りました。ここにユダヤ系の銀行が軒を連ねたため、のちに世界の金融センターへ変貌します』。

6、イギリスの悪辣なる収奪システム

宇山:

『イギリスを覇権国家に押し上げた主要な原因は産業革命による生産力拡大でないことは明らかです(*)。イギリスが他国よりも優位に立つことができた根本的な原因は、他国がマネできない独自の収益構造を形成することができたからです』。

(*)イギリスの国際収支図表 17-1 が、この書籍で記載されています。

出典: Albert Imlah 『Economic elements in the Pax Britannica』

茂木:

『工業製品の輸出で収益を得る産業資本の段階から、資本輸出(海外投資)でリターンを得る金融資本の段階へ進んだわけです。これはすべての工業国がたどる道です』。

宇山:

『イギリスの悪辣なる収益構造の拡大は3つの段階があります。第一段階は16世紀の私掠船の略奪、第二段階は17~18世紀の奴隷三角貿易、第3段階は19世紀のアヘン三角貿易です。』

第一段階の私掠船とは、国王の特許状を得て、外国船の捕獲にあたった民間船で、国王が許可し、国王や貴族が資金援助した海賊船でした。イギリスの私掠船は、スペインやポルトガルの貿易船を繰り返し襲い積み荷を略奪しました。積み荷を売却した利益は国王や貴族に還元され、イギリスの初期資本の蓄積に寄与します』。

7、「黒い積み荷」と「白い積み荷」

茂木:

『イギリスの第2段階の収奪は17世紀後半以降の黒人奴隷貿易です。イギリスは銃や剣などの武器をアフリカに渡し、黒人奴隷と交換します。黒人をカリブ海の西インド諸島に搬送し、砂糖プランテーションで強制労働させて、砂糖をイギリスに持ち帰る三角貿易を行います』。

茂木:

『黒人奴隷貿易は、中世のムスリン商人が始めました。これを模倣したのがポルトガル人で、その規模を拡大させたのがイギリス人でした』。

宇山:

『イギリスは 17～18 世紀、スペインやフランスという競合者と戦争をし、彼らに勝利することで、奴隷貿易を独占し、膨大な利益を上げていきます。当時、奴隷部益ビジネスへ出資した投資家は 30%程度のリターンを得たとされます』。

8、インドのアヘンと中国の茶を結びつける三角貿易

宇山：

『奴隷三角貿易の衰退とともに、19世紀、イギリスはインドのアヘンと中国の茶を結びつける三角貿易をはじめます。イギリスで喫茶の習慣が広がり、イギリスは中国の茶を求め、銀で支払いをしていました。そのため、イギリスは輸入超過状態となり、銀の流出がとまりませんでした。そこで、イギリスはインド産のアヘンを中国に輸出し、銀に代替えさせ、茶を中国から得ました』。

図説 満州帝国 太平洋戦争研究会著（河出書房新書）引用

『十九世紀は東アジア地域における、ヨーロッパ列強に新興国・日本を加えた“植民地争奪の世紀”といってもいい。東洋でその先陣を切ったのはイギリスで、1840年に始まったアヘン戦争によって香港島の割譲など中国侵出の足掛かりをつくったイギリスは、その後もさまざまな口実をもとに次々と中国での権益を拡大していった。フランスとロシアも後に続いた』。

- (*)8 列強とはイギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、イタリア、オーストリア、ロシア、日本
- (*)満州国は国家といいながらも、日本の完全な植民地であったことなどが書かれている
- (*)1937年12月13日、南京を占領した日本軍、大虐殺事件を起こす、、

イギリス独自の収益構造(ビジネスモデル?)に改めて驚いている。『阿片の中国史』(新潮新書 著者 たん ろみ)を読みながら近代文明に対する容認の気持ちが揺れている。また植民地支配の道具は言語であること。原住民は宗主国民の命令が聞き取れればよい。読み書きは必要ない。余計な知識を持つことば好ましくない。この支配思想が、今の2極化を生み出していると思えない(矢間)

4、なぜ英語が、国際共通語として成り得たえたのか

—なぜ英語が、いまの位置を享受できるようになったのか—

英語は「物・事・考え」を分かり易く論理的に表現する、記述するのに適した言語である。英語は、構造的にしっかりした言語で、学習しやすい言語である。英語は、普遍性を持った言語である。つまり、翻訳ソフト(AI 翻訳)の支援が得られやすい言語である。では、なぜ英語が今の位置を享受できるようになったのか？

19世紀に始まった科学技術、工業化、システム化の文明時代は、論理的で分かり易く誤解を生まない言語が必要であった。そのニーズに適した言語が英語であった。20世紀は、英語を母語とする英国と米国が、圧倒的な政治、経済、軍事力の優越を維持続けた世紀でもあった。

その結果「欧米式」のグローバル化が急速に進展した。グローバルなシステムを経営・運営するためには、そこで使われる言葉を、できるだけ一本化することが効率上必要であった。それが英語である。

その結果として、唯一の国際共通語としての英語の位置は、ますます強固になる一方である。しかし英語習得に於いて日本人は、世界の中で最も不利な条件下にある。我々日本人が、どれほど不利な戦いを強いられているかは考えるだけでも憂鬱になるが、しかし逃げるわけにはいかない。これは、グローバル化という共生と競争(戦い)だから、このツール(英語)の扱いが、できるだけ上手くなるように修得するしかない。

日本語は「感情」の表現には向いているが「論理的表現」には向いていないと言われている。問題がここにあり、それを解決するためには、このようにしなければならない、そのためにはこのような努力が必要である、等々を説得し理解を求めるためには論理的に筋道を立てなければならない。その論理的説明には言語という道具が必要となる。

西洋世界が長きに渡って世界をコントロールできた要因の一つに、この言語、つまり英語、欧州言語の存在を挙げることができる。

この論理的で構造的な言語を持っている強さでもって、西洋世界は自国内の経営だけでなく、植民地を経営する場合も、うまく収めてくることができた。植民地から独立した諸国が、今でも元の宗主国の言語を公用語としていることから、その言語による浸透力が高かったことが分かる。

中でも英語が「ナンバーワン言語」の位置を占めることができたのは、言語そのものが他の欧州言語と比べて構造や時制や人称が「単純」であるということが、大いにその力となったと考えられる。

ともあれ自分たちの文化とは大きく異なる文化の下で、生きてきた世界の人々へ、こちらの考えを述べ、何とか合意を得ようとするならば、論理的に筋道立て、明快に表現するしかないことは明らかである。

欧米人の思考(物の考え方、見方)が言語を生み、新しい文化を作り出してきた。言語が先か、文化が先かは、定かではないが思考と言語は一致している。

ご承知のように英語は対立の図式で表せる文化の下にある言語である。英語で事実報告や考え方や分析された情報をやり取りする場合、この対立図式の基で、思考や分析、議論を行うことになる。世界の人々へ、世界の共通分野での「物・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。

米国は国が広く多民族の集まりである。お互いがコミュニケーションをとるための言語として発達してきたのが英語(米語)である。日本人からみれば味気も素っ気も無い単純明快な言語であるが、技術の説明には適している。技術はまさに文明である。技術の説明には文才は必要ない。あるがままの事象を明快に書くだけである。つまり「文明言語」で書けば済む。できるだけ文化の色合いを消した日本語、これが「文明日本語」である。

PART-3でも述べるが、英語を学習するときに、なぜそのような表現方法をとるのか、なぜそのような言い方をするのか、を理解することが基本である。文化としての英語を学ぶなら、話は別である。しかし、文化に密着した言語が簡単に外国語として学習できるわけではない。

5、欧米の文書、あるいは主張を通すために

—篠原ブログ:(133) 欧米の文書、あるいは主張を通すために—

欧米社会で生産される文書、私が知っている範囲で言えば、アメリカ社会で生産される文書の完成度とその量(1件あたりのページ数)には、いつも圧倒される。文書、例えば政府の戦略書、調査委員会の報告書、企業の年次報告書、製品の説明マニュアル、特許仕様書などを作成する情熱とその技巧は、とても僕らが真似できるものではない。その背景記述からなにかから、実に分かりやすく丁寧に書かれている。

彼らはなぜに、あれほどまでリキ(力)を入れて丁寧に一つの文書を構築するのだろうか。いろいろな原因が考えられるが、その一番の理由は、「自分の主張」を通すためだろう。そう見れば、あの行届いた書き方は、親切心から出たものではない。自分の主張を通すために、受け取り手であるあなたの理解を得て、自分の味方になってもらうために、とことん書いているわけだ。

自分の主張を際立たせるためには、他者が何をやってきたかを丁寧に記し、その違いをはっきり言う必要がある。だから、他者の業績を尊重して、あれもこれも参照(references)を挙げているわけではない。

自分の主張が通るか通らないかが、自分の存在が承認されるか否定されるかに直につながっている過酷な社会においては、報告書一つを出すにも、仕様書一つまとめるにしても、いささか大げさに言えば、命が掛かっている。

翻ってわが日本を眺めれば、文書は本命事項のつけたしの域を未だにでていない。主張をあからさまに述べることは、はしたない行いであるという心が底流に流れているから、あるいはあからさまに述べると自分が「村八分」になりかねないので、どうしても控えめになってしまう。結果として何が述べられているのかよくわからない文書になってしまうことが多い。

だからと言って、このまま放っておくしかないのだろうか。もちろんいいわけがない。曖昧な文書は国際社会では通用しないのだから、文書は明快に書かなければならない。そのとき、欧米流に、主張を通すために明快に書けというのは、日本人には無理なのか(2006./04/02 篠原泰正)

—篠原ブログ:(288) 物を見る目、あるいは文章—

今から15年ほど前に出た、司馬遼太郎さんの対談集「東と西」は、読むたびに何かを教えられる貴重な本である。

その中に、京都大学のフランス文学の大先生桑原武雄教授との対談がある。「物をその物として見る精神」と小見出しがつけられた話の中で、日本人は物そのものをリアルに記述する習慣がなかったという話から、桑原先生の言：

『ことにイギリス人というのは、物があると、その物をつまらんとか、これは本当の実在だろうかとか、宗教的というか哲学的なことあまり考えないのです。ここにテーブルがあったら、これは大きなテーブルだ、そこへ白い無地のテーブルクロスが乗っている、そういうことを精密に書いていくわけでしょう』。

発明した事実を正確に記述するなんてことは、われわれはどう逆立ちしても、彼らアングロ・サクソンには勝てないか？

続いて、『日本人も、これはテーブルだということはわかるんです。けれども二メートル余りのテーブルだとか、そういうふうには書かない。部屋へ入ったらテーブルクロスをかけた食卓があって、そこへわれわれはゆったりと対座したということで終わりです』。

風景の中に自分も入り込んでしまうわけだ。だから、ゆったりと座った、ということが記述のポイントとなる。続いて

『つまりこちらは(*日本人は)景色でも建物でもそれにふれて感情を動かすでしょう、ちょっとオーバーな言い方をすれば、それへの詠嘆、いつもそれが書いてあるんです』。

対象物を自己と対立する客体として、冷静に眺めて描写することができる西洋人。それに比べると、われわれはなんせ自然の中に入り込んで、溶け込んでしまう「共生」の心の持ち主だから、対象物と触れ合った自分の心の動きが大事であり、対象物がどのようなものであったか、その事実の描写などは念頭にないわけだ。

さらに、途中をおいて、先生は続ける：『中国人でも、日本人と違うところがあります。正確に書いている感じがする。陳寿の「三国志」を見ても、簡潔だけど、ちゃんと書いてある』。

『日本の場合は、桜なら桜という物そのものよりも、自分が桜の花を美しいと思ったという、その桜と自分との関係とか感慨を書く。後世の人が自分の文章を読んでもらったら、いつ、京都のなんとかいう寺に桜があったということがわかるよりも、そのときに、なんとか麻呂という敏感なやつがいて、桜が散るのを見てこういう歌を作ったということだけを知って欲しいのです』。(2006/12/12)

—篠原ブログ(319):ゲルマン語とラテン語・フランス語—

英語やドイツ語のゲルマン語系は、ローマ時代にはそのラテン語の影響を受けたことはなく、ラテン語を借用し始めるのは中世以降、特にルネサンス以降に、知識人が頭で輸入したものがほとんどである。但しイングランドは、11世紀にフランスにいたノルマン族に征服された時があるので、そのとき大量の俗ラテン語であるフランス語が英語に導入された。

さて、今回の主題は、論理的に表現するための師匠は誰か、ということで、結論から言うと、ローマの前の師匠であるギリシャ語とその生徒のラテン語が欧州の先生のような。ドイツ語や英語も理屈っぽいけど、それはどうやらローマのずっとあとになって、必死にラテン語を学び取り入れた成果なのではなかろうか。

一方、ラテン語の直系にあたるフランス語、スペイン語、イタリア語はどうかというと、論理的であるはずだが、どうも印象としてはそれよりも「愛」を語るのに適した言語に変化していった気配が強い。つまり、われわれが理解する「ロマンス」の方に主軸が流れたのではなかろうか。その意味では、これらの言葉はラテン語系と言うより「ロマンス語」と呼ぶほうが感覚的にはぴったりする。

なお、ラテン語とは、ローマ人が侵入し、支配権を握った今のローマ市を中心とする地方の名称がラテンであり、そこの土着の民族の言語であったことに由来する。つまりローマは自分達の言語(どのようなものかは不明)を捨てて、あっさりと、言語として格段に優れていたラテン語を公用語として採用したらしい。

当時のローマ人は偏屈ではなく、開かれた心の持ち主だったのだろう。同時に自分達のラテン語よりもギリシャ語の方が優れているとみなし、教養ある人はみな懸命にギリシャ語を学習したようだ。そのラテン語が、ローマが押さえた地域ごとに変化したのが今のフランス語、スペイン語(正式にはカスティリヤ語)、ポルトガル語、カタロニア語、ルーマニア語などである。従い、これらの言語はローマ風の意味でロマンス語と称されることにもなる。

ラテン語そのものは日常の言語ではなくなり、欧州のエリート層の子弟を悩ませた古典文学と文法の授業とカソリックの公用語としてのみ生きてきたことになる。論理的に表現するという、事実をできるだけ正確に描写することから出発している。欧州において長い、長い研鑽と変化の歴史から生み出されたものである。(2007/02/13)

6、欧米人の「モノの見方や考え」の違い

私は、前の会社で海外向けのサービス部品の手配をしていたことがある。「海外技術サービス部署」には、海外駐在員から帰国したサービス技術者達が在籍していた。現地女性を嫁にして連れて帰国した強者もいた。彼等から日本人と外国人の気質の違いを機会あるごとに聞かされてきた。

『ドイツ人は、約束、時間に対して非常に厳しかった。約束したことが守れないと、なぜ遅れたのかを問い詰められた記憶がある。例えば手持ち部品が無くて取り寄せ時間を要したことで迷惑をかけたことを詫びても”なぜ“そのようなことが生じるのか、その理由を論理立てて説明しないと納得はしない。確かに“なぜ？”を追うことで、当方の部品管理の杜撰さが浮かび上がり、改善する事項が明確になり、我々サービスマンの負担が軽くなったことには感謝している。

一般的に述べれば、ドイツ人の多くは個人主義で自分の意見に対する信念を貫き、集団の和を重んじる社会ではないようだと感じた。しかし付度したり、空気を讀んだりすることはないので、余計な気を使わないでよく、プライベートでの付き合いは楽しかった。ただ、他人の心を傷つけるような発言をすることが時々あった』。独から帰国したOさんから聞いた話のまとめ

『オランダ語は、喋れなかったが、英語が通じるので困ることはなかった。社会全体に英語が普及しているな、という実感はある。それから日本人に対しては非常に親しみを持ち、好意的に接してくれているので仕事はやり易かった。オランダと日本は江戸時代から交易があり、オランダ商人やオランダ医学の関係者達によって、日本人の他人を思いやる温かい心、秩序ある日本人の生活ぶりが伝え続けてきたからだと思う。一般的に述べれば、オランダ人は多様性と自由を尊重し平等感を持っているようだ。一方、言語は明確な表現を好み率直に自分の意見は述べていた』。

蘭から帰国したNさんから聞いた話のまとめ

『カナダは、他民族国家で多様性を受け入れてくれているので日本人であることを強く意識することは無かった気がする。カナダ人は人懐こくて穏やかで礼儀正しいと思う。半面、時間に対してはとてもルーズで大雑把、約束やルールもあんまり気にしないので、自分はマイペースで仕事をしていた気がする。ちよいとしたことでもすぐに“Sorry”と謝るから、こちらも”ごめんなさい“で解決』。カナダから帰国したSさんから聞いた話のまとめ

—楽しみにしているテレビ放送(BS)は、「ちいさな村の物語 イタリア」—

『美しく生きるとのこと……。気候や風土に逆らわず共存しながら暮らす。先人達が築き守ってきた伝統や文化を誇りに思いながら生きる。人間本来の暮らしが息づく「小さな村」が注目されています』。(BS 日テレ番組から引用)

1996年、私はスペインに移住している真覚さんへコーディネーターをお願いして欧州共同体商標庁(アリカンテ市)を訪問したことがある。訪問目的は、日本人も欧州共同体商標制度を利用し商標権を獲得できるという新制度に関する情報収集であった。

この時に「アリカンテ」だけでなく「マドリッド」、「トレド」の街を歩いたが、何とも言えぬ心地よさを感じた。カラッとした青空だけでなく、バルで過ごした心地よさ、市場での活気、スペイン人の陽気さと人懐こさに惹かれ、瞬く間にスペインが好きになった。

後年、カミサンと一緒にスペインへ行った。真覚さんがレンタカーを手配してくれて運転と観光案内をしてくれた。生涯忘れられない贅沢な旅行であった。訪問先は、真覚さんが住んでいる「マラガ市」を起点としてスペイン南部アンダルシア地方、グラナダ、ゴールドバ、白い街……まさに太陽と情熱の国である。様々な文化遺産は、見応えがある、という単純な言葉では片づけられるものではない。

スペイン人は、お金を使って物質的な豊かさを追求するよりも、経験や体験を重視しているように見えた。私が好きなテレビ番組である「小さな村の物語 イタリア」と何かしら共通するものがあると感じた。

真覚さんが言うには、「スペイン人とイタリア人はラテン系で、中でも田舎暮らしをしている村人には似ている文化があります。それは、調子が良い時も悪い時も、いつも誰かが居るとのこと。つまり日々を楽しく暮らせることです」。つまり、家族との生活が最優先であり、一番大切にしているとのことで、その生活を守る為の収入さえあれば良いわけで、その生活が犠牲になるような働き方は望んではない。

その話から飛躍してアングロ・サクソン系人とラテン系人の「物の考え方や観方」の違いや「価値観と気質」の違いまで話が及び、改めて言語の成り立ちについて関心が益々強くなった。このテーマに取り組んできた篠原先輩のブログから拾い出しのが、第2部「近代文明とラテン文化」である。(矢間伸次 2024/05/03)